

ベイズ推論による機械学習入門

ベイズ推論による学習と予測(3.1-3.2)

2022/5/11 情報理工学科 竹川修平

目次

第3章 ベイズ推論による学習と予測 (3.1-3.2)

- 3.1 学習と予測 11
 - 3.2 離散確率分布の学習と予測 11
-

3.1 学習と予測

学習と予測

- 一般的に機械学習の分野では, モデルの持つパラメータの値をデータから決定することを**学習 (training, learning)**という.
 - ベイズ推論の枠組みでは, パラメータも不確実性を伴う確率変数として扱うので, 確率計算によってデータを観測した後のパラメータの事後分布を求めることが**学習**にあたる.
 - 多くの場合では単純にパラメータを得るだけでなく, まだ観測されていない値に関する予測を行うことも主要な課題になる. 予測分布に関しても確率推論を使って求め, 未知の値に対する平均値やばらつき具合などの各種期待値を調べたり, サンプルを得ることによって視覚的に予測を理解することが行われる.
-

パラメータの事後分布

•

\mathcal{D} : 訓練データの集合

•

θ : モデルに含まれる未知のパラメータ

ベイズ学習では次のような同時分布 $p(\mathcal{D}, \theta)$ を考えることでデータを表現するモデルを構築
$$p(\mathcal{D}, \theta) = p(\mathcal{D} | \theta) p(\theta)$$

•

パラメータに関する不確実性は事前分布 $p(\theta)$ を設定することで反映される.

- $p(\mathcal{D}|\theta)$ は特定のパラメータ θ からどのように \mathcal{D} が発生したかを記述しており, これを θ の関数とした場合は**尤度関数(likelihood function)**と呼ばれる.

データ \mathcal{D} を観測した後ではパラメータの不確実性は次のように更新される $p(\theta|\mathcal{D}) = \frac{p(\mathcal{D}|\theta)p(\theta)}{p(\mathcal{D})}$

- この条件付き分布 $p(\theta|\mathcal{D})$ を計算することがベイズ学習の枠組みでの「学習」にあたる

- 事後分布 $p(\theta|\mathcal{D})$ は $p(\theta)$ と比べて尤度関数 $p(\mathcal{D}|\theta)$ を通すことによって観測データ \mathcal{D} に関する特徴を捉えていることが期待できる

3.1.2 予測分布

- x_* : 未観測のデータ

学習されたパラメータの分布を使って**予測分布(predictive distribution)**を計算することによって未観測データ x_* に関する知見を得られる. $p(x_*|\mathcal{D}) = \int p(x_*|\theta)p(\theta|\mathcal{D})d\theta$

- $p(\theta|\mathcal{D})$ で様々な θ について重み付けして $p(x_*|\mathcal{D})$ を平均化

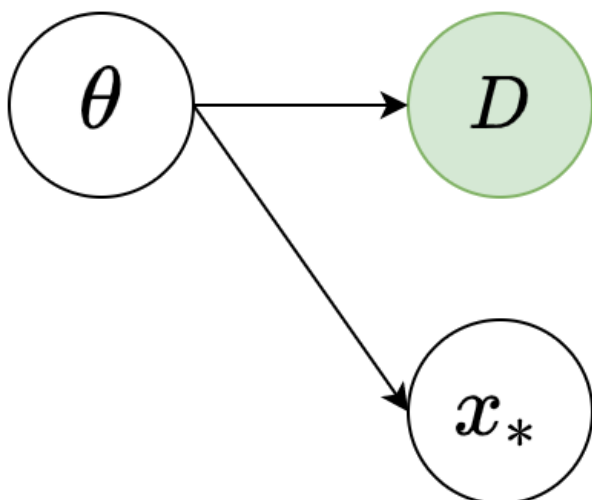


図3.1 予測値を含めたグラフィカルモデル

上のモデルではデータ \mathcal{D} も未観測値 x_* もパラメータ θ に発生過程が支配されているが、 \mathcal{D} と x_* には直接的な依存関係は仮定おらず、パラメータが与えられたもとで条件付き独立であるといえる。このような仮定を置くとき、観測データは i.i.d.(independent and identically distributed)であるという。

このような仮定において、同時分布は次のようになる $p(\mathcal{D}, x_* | \theta) = p(\mathcal{D} | \theta) p(x_* | \theta)$ データ \mathcal{D} が手元にあるとすれば、残りの変数の事後分布は

$$p(x_* | \theta, \mathcal{D}) = \frac{p(\mathcal{D}, x_* | \theta)}{p(\mathcal{D} | \theta)}$$

上の式を、周辺化によって θ を除去すれば予測分布が得られる。

データ \mathcal{D} を観測していない状態で予測分布を求めても良い。 $p(x_*) = \int p(x_* | \theta) p(\theta) d\theta$

この場合は事前知識 $p(\theta)$ だけに頼っているので非常に大雑把な予測である。

データ \mathcal{D} と未観測値 x_* が条件付き独立なモデルにおいて、未観測値 x_* を予測するには、まず、 \mathcal{D} を用いてパラメータの事後分布を学習し、その時点で \mathcal{D} は捨て、得られた事後分布を周辺化することによって予測分布を求める。

データ \mathcal{D} の情報を全て事後分布 $p(\mathcal{D} | \theta)$ に押し込めるのは計算上非常に便利だが、データ量が増加しても、モデルの表現能力は変化しないという制限がある。

データ \mathcal{D} に合わせて予測モデルの表現能力を柔軟に変える確率モデルとして**ガウス過程(Gaussian process)**や**ベジアンノンパラメトリクス(Bayesian nonparametrics)**がある。

3.1.3 共役事前分布

a

3.1.4 共役でない事後分布の利用